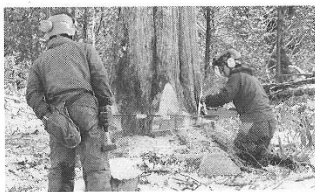


映画

文化

自然を畏敬し、全力で生きる

『木樵』『渴きと偽り』『こころの通訳者たち』



↑『木樵』。10月14日(金) ヒューマントラストシネマ渋谷ほか全国順次ロードショー。©2021「木樵」製作委員会



↑『渴きと偽り』。9月23日(金)、新宿シネマカリテほか全国ロードショー。©2020 TheDry Film Holdings Pty Ltd and Screen Australia



↑『こころの通訳者たち』。10月22日(土)より新宿K's cinemaほか全国順次ロードショー。©Chupki

人間が支配できない自然や運命のときには体当たりし、ときには寄り添いながら、全力で生きる人々を描いた3作。(石塚とも)

『木樵(きこり)』は、岐阜県飛騨地方を舞台に、林業に専心する人々を追ったキムンタリー。同県出身の宮崎政記監督は、父親も木樵であったが、林業不況の中、同じ道に進むことを断念、記録映像作家として活動してきた。30年後、監督は木樵の仕事に5年間従事してきた面家(おもや)一男さんと出会い、彼の仕事に密着する。山を守るための地味な作業の積み重ね、映像から仕事と山への愛情が伝わってくる。

『渴きと偽り』は、ジェー・ハーバーのベストセラー小説をオーストラリア出身のロバート・コフリン監督が映像化した犯罪サスペンス。少年のころに同級生の少女の死への関与を疑われたことで故郷を離れた主人公が、かつての親友が起

件の真相を追うという筋書きだが、本作に強烈な個性を与えているのは、彼の故郷である郊外の小さな街だ。そこには300日以上雨が降っていない。天候が人々の心を荒ませ、共同体の不信感に拍車をかける。もともと居住可能地域が国土の2割という豪州、近年は気候変動により都市部でも干ばつや山火事の被害が深刻化している。厳しい環境の中で、人の理性や思いやりをつなぎとめるものは何なのかを考えさせる。

『こころの通訳者たち』は、山田礼於監督によるドキュメンタリー。一つの舞台作品に、耳の聞こえない人のための手話通訳と目が見えない人のための音声ガイドを同時につづけるという作業に挑戦した人々の取り組みを映像に収めた。実際に目が見えない人、耳が聞こえない人、演劇の関係者、手話通訳、ナレーター、映画館の運営者など、さまざまな人がさまざまな視点から意見をぶつけ合い、ひとつの人間では捉えられなかった大きな宇宙の姿を描き出す姿に心打たれる。